

「銀座街づくり会議」発足シンポジウム

# 「都市の街並みと建築」

建築はそれ一つで存在しているのではなく、街並みのなかにあります。そしてその中に生活があります。特に都市の街並みと生活の中において、建築はどうあるべきなのでしょう？また、歴史もあり個々人の思い出もつまった街、繁華街のシンボルとも言える銀座のような街においては？

銀座はこれまで、破壊と再生を繰り返しながらも「銀座らしさ」を保ち続けてきました。街並みを生かし、その街らしさを保つ建築とはどういう建築でしょうか？そして、銀座がこれからも美しい街並みであり、より魅力的になるために、大切なことは何でしょうか？

2004年5月24日(月)

16時～18時

紙パルプ会館 フェニックスホール

共催：銀座街づくり会議・銀座通連合会  
後援：全銀座会・中央区・国土交通省東京国道事務所

## ■講師プロフィール■

### □榎 文彦（まき・ふみひこ）

建築家。1928年生まれ。ワシントン大学、ハーバード大学、東京大学などで助教授、教授を歴任。作品に「代官山ヒルサイドテラス」「スパイラル」「東京体育館」などのほか、海外での作品多数。著書に『見えがくれする都市』『記憶の形象』など。

### □團 紀彦（だん・のりひこ）

建築家。新日本建築家協会新人賞、日本建築学会賞業績賞など受賞多数。NEW TAIWAN by DESIGN 国際コンペ一等（日月潭地区、CKS Airport）。作品に「八丈島のアトリエ」「ウトコリミテッド室戸工場」他多数。

### □陣内 秀信（じんない・ひでのぶ）

法政大学工学部建築学科教授。イタリア建築・都市史。イタリアを中心に、イスラム圏を含む地中海世界の都市の特質を解き明かし、そこから得た視点で東京の街のありかたに提言を続けている。著書に『東京の空間人類学』『都市を読む\*イタリア』他多数。

### □森 まゆみ（もり・まゆみ）

作家。地域雑誌『谷根千』を仲間と発行するなかからまちづくりに関わる。著書に『小さな雑誌で町づくり』『読書休日』『かしこ一葉』『鷗外の坂』など。

### □三枝 進（さえぐさ・すすむ）

銀座通連合会常務理事を経て、現在、銀座通連合会理事。ギンザのサエグサ代表取締役社長。銀座歴史研究者としても知られ、銀座に関する執筆・シンポジウム等多数。銀座文化史学会。

---

---- これから銀座街づくり会議発足シンポジウム「都市の街並みと建築」を開催いたします。開会に当たりまして、銀座通連合会会長、銀座街づくり会議代表でございます、福原義春よりご挨拶申し上げます。

**福原義春** 本日は、大変多くの皆様においでいただきまして、ありがとうございます。世の中は今、グローバルゼーション、あるいはヨーロッパ連合といった大きな方向に動いておりますが、それと同時に別なベクトルも起きております。それは、その中の都市が充実してくる、あるいは都市の中の一部のゾーンが独立して都市の機能を発揮していくとか、そのようなことを考えていく時代に入ってきているように思われます。つまり作用と反作用です。膨張する方向と、収縮しようとして主張していく方向とが同時に動いているように思っております。

日本の中にも、そういった例が幾つもございますが、たとえばヨーロッパでいえばナント、あるいは今年のヨーロッパ文化都市に指定されておりますフランスのリール、イタリアのジェノバ、またスペインのビルバオ等々、数え上げればきりがありません。そのような、一つの小さな地域に高度な市民社会を作りあげ、文化的・政治的な求心力を作りあげ、昔ながらの都市構造というものを復活していこう、という動きが世界中で広がっているわけであります。

銀座では、130年以上の伝統を踏まえて一つの場づくりというものが完成して参りまして、ますますその洗練度を高めているわけですが、このへんで「新しい銀座の街づくりを考えていかななくてはならない」、「21世紀型の銀座の街づくりを考えていかななくてはならない」と、私たちは考えております。時しも、銀座の街はだんだんと商店の姿が入れ替わっていくような状況にあります。また、景観との関係も考えていかなければなりません。

そこで、この世界では大変よく知られている先生方においでをいただきまして、「これからの銀座はどうあるべきか」ということを考え直していただくというのが、今日のシンポジウムの目的でございます。

皆様、大変ご関心と興味をもたれてお集まりいただいたことを感謝いたしますし、また銀座が銀座の力でそういったことをこれから再構築していく状況・時代にあると

---

いうことに対して、皆様のご支援をお願いしたいと考えております。簡単ではございますが、今日ご参会のお礼のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

## ●基調講演「都市の生活と建築」

榎 文彦

ご紹介いただきました、榎です。「都市の生活と建築」というタイトルは、すごく漠然としたテーマですが、今日はこの後、銀座についてお話があるということで、都市の中でも特に「道空間」について、皆さんが関心があるかと思うものを、海外・日本の事例をあげながら、お話しさせていただきたいと思います。

僕自身は70年以上前にこの東京で生まれまして、恵比寿・目黒・五反田のあたりにずっと住んできて、現在も住んでおります。小学校は、三田から天現寺、日吉と移りまして、大学は本郷でした。その後、10年くらい海外に行っていたのですが、帰ってきて東京の日本橋に事務所を開きました。ですから、自分の日常の行動範囲としては、銀座も入っていたわけです。日本橋には30年近くおりましたが、数年前に事務所を代官山に移し、現在に至っております。そういったことで、東京そのものを、かなり同じところから定点観測することができたと思います。

### 道空間の考え方

今日は「道空間」ということをお話ししたいのですが、道というのは、点と点、場所と場所を結ぶ線であるのですが、同時に道の両側を、三次元的に包み込んでいる空間で構成されているものです。道空間というのは、都市あるいは集落の生活で、実は最も基本的な要素であります。そして、地域社会の長い歴史の中で道に対するいろいろな考え方が育ってきたと考えることができると思います。

ここに道に対する3つの基本的な考え方があります。第1は「道と建築が密接に関連している道空間」です。たとえばヨーロッパの古い都市国家、あるいは城塞都市に見られる形態で、都市が一つの塊として建築と道が一体に出来ていったと考えることができるかと思います。

それから第2に「道が中心にあり、道から都市が生まれる」というタイプがあります。これは紀元前5世紀のギリシャのミレトスの都市などにありますように、都市国家の中にある市民の平等性というものをまずイメージし、それを象徴した道空間かと思います。それから、例えば日本では京都の坊条制の道が挙げられます。また、これからお話しになります銀座のもととなる町人町の道のありかたもそうですね。

最後に我々が見逃すことできないのは、「自然の要素と道が一体となって、新しい道空間が切り開かれる」というタイプです。そういう道の作り方というものも、これは特に日本の場合、多くあったと思います。



ここで重要なのは、それぞれの3つの形式が純粹に現れているのではなくて、どちらかという、これらが混ざって、これまでも現在も都市にその姿を現しているということができると思います。

スライドで最初にお見せするのは、イタリアの北部ヴェロナの町ですね。こういった種類の街はヨーロッパには非常にたくさんありますが、ここでは道空間とそれを作り出す建築が一体となり、道だけではなくて広場を作るといような形で形成され、我々にとって非常に印象の深い道空間となっています。

こういった形で道と建築を一体につくっていく現代の例としては、たとえばドイツのBプランのように、壁面線を高さと共に徹底的にコントロールするといった例もありますが、実際の数から言うと、減少方向にあると思います。

次はサンポール・ドゥ・ヴァンスという城郭都市で、ニースを少し北に上がったところにある美しい街です。ここにみられますように、城郭都市の中では、その城壁に囲まれた、限られた空間の中にいかに多くの人と一緒に住むか、ということがポイントになります。ですから、狭い道に対してそそり立つ壁面が展開する、そういった特徴をもった都市の様相がよくわかると思います。

次はアムステルダムですね。ご存知のように運河の町、あるいは海運によって開かれた都市として、非常に有名なところです。ここではまず、運河の経路が中心に一つのインフラストラクチャーがあり、そのまわりに平行して道空間がつくられております。そして、それに沿って壁面線に整合性のある、スタイリッシュな街並みが展開しています。そして二つの町並みの間にグリーンのスペースが、これは非常にプライベートにつくられています。運河自身を自然とみなせば、自然とそうした道空間の整合性を持たせたシステムが確立されております。これはヴェニスなどについても言えることだと思いますが、私が非常に大事だと思うのは、「都市であれ建築であれ、それはその社会が作ろうとした理想的な空間の秩序の形式の現れだ」ということです。古代から近世に至るまで、さまざまな優れた都市というのは結局そういう理念をもとにつくられてきており、理想とする秩序というものの形式の表れであるというこのことは、よく覚えていただいていた方がいいかと思います。

アムステルダムの場合は、ヴェニス等とは違い、運河だけでなく、そこに車道及び

---

歩道の空間があり、タウンハウスと歩道の中に一種の媒体としてのステップがあるんです。大体こういうところは1階が少し持ち上がっておりまして、半地下にも光が入る状況になっています。こういった形式は、長年にわたる地域社会の人々の知恵によってつくられています。先程言いました、秩序のある形式の一つなんですね。それは今でも厳しく守られておりまして、このアムステルダムでも景観規制や建築規制が非常に厳しい。私の友人でもう亡くなった建築家が、「アムステルダムに建物をつくる時は、いろいろな規制の中で非常に苦労してきた」と言っていたことを覚えております。

次は、最も代表的な格子状道路の一つとしてニューヨークです。ニューヨークは最初、ニューアムステルダムといわれ、アムステルダムにちなんだ名前がつけられておりました。おそらく18世紀に江戸の人口は100万を超えていたのですが、その頃ニューアムステルダムには6万5千人しか人がいませんでした。一説によれば、この格子状パターンの思想の背景には、いかにして土地の不動産売買、つまりトランスアクションを容易にし得るか、ということが理由にあったとのことで、そういう理由でグリッドが生まれてきたというのは、大変興味深いと思います。

超高層で埋められた街であるというのがマンハッタンに対する一つの印象です。しかし、それにも関わらず道空間には、歩道の広さによってさまざまな活動や生活が展開しており、その面白さは日本の道空間と少し違って、道幅の広さといったものも関係しているかもしれません。

これは同じ均質に構成された街区から、さまざまな自由の意思に従った高層ビルが建っているという、建築家レム・コールハースが若い時に書いた『錯乱のニューヨーク』という本の中にある、ニューヨークを象徴したイラストです。

しかしこうした道を歩いていくと、小さなポケットパークがあつたりして、非常に人間的な息遣いというものもあるわけです。大分前ですが、グリニッジヴィレッジでは、道沿いの建物の外壁にさまざまな情報を交換する、インフォメーションの貼り紙が生活の一部になっている道空間の使われ方が見受けられました。

さらに、そのヴィレッジからソーホーに向かいますと、道幅に注目してもらいたいのですが（歩道が非常に広く、大道芸人の周りに人の輪があるスライド）、大道芸人のパフォーマンスをみんなが見ています。非常に高層で埋められた街でありながら、道空間というものに、何か特別の雰囲気を与えていると思います。

それぞれの道空間に歴史、ライフスタイルというものが、自然に反映されている。

そこで、我々旅行者や住民にとって、非常に面白い、興味のある文化的経験ができる場所と考えることもできるということです。

また、ニューヨークには、タイムズスクエア、グラマシーパーク等、何箇所かスクエアという形で広場がありますが、その中でも人工的に造られた内部の広場として、IBMビルの大きなガラスに囲まれた広場があります。これが印象的なのは、この下にIBMギャラリーがあり、上にIBMのオフィスがあるのですが、まったくの無料で開放されているということです。つまり、閉じた広場であるということです。ヨーロッパの広場に見られるように、常にたくさん人間がその中に入っているのではなく、誰がいつどこで何をしようとかまわらないという空間になっている。皆ぼんやりと思いにふけったり、本を読んだりという場所が、この中に作られているのです。僕なんかは、ニューヨークの中で一番ほっとする場所の一つに挙げていいと思います。

このように、19世紀の建築では、道の上に屋根をかけて、新しいパブリックな場所を生み出しているのがイタリア、フランスなどヨーロッパにあるパサージュ、あるいはギャラリーエ（ガレリア）と称される道空間の形だと思います。たとえば、ミラノでは右側に有名なミラノの大聖堂がありますが、ちょうど十字型に4つの建物によって、中に素晴らしい、道空間が展開するようになっています。

ここにはさまざまな複合施設があります。右側の方に一度私も泊まったことのあるホテルもあるのですが、ここは24時間オープンにされ、そこに美術館や本屋、さまざまなショップがあり、ある意味での、昼も夜も変わることはない空間を提供しているわけです。

パリのグランセールや、ロンドンに行くとセント・ジェームズ街に素晴らしいパサージュがありますが、こういうものはやはり、はっきりと決められた、道と建築とが合体したそういう状況の中で生まれてくる空間です。しかし同時に上から昼光が入ってくる、そういった魅力のある場所を作りあげてきたわけです。

## 人を中心にした道空間

次に一転して、まったく車のない道空間として、ギリシャの群島の一つのイドラという島を例に出したいと思います。イドラはギリシャのアテネの外港のピラエスからあまり遠くないところで、幅が20km、奥行き4～5kmの本当に樹木のない岩石で覆われた島です。だいたい16世紀以降だったと思いますが、当時地中海沿岸の海運が



非常にさかんになり、新しい港として発達し、そして時にはオスマントルコ等の侵入を受ける際に避難する場所として、こういった港町ができたわけです。

この写真は、ほぼ50年前の1950年に撮ったものですが、港があり、その周辺に教会やタウンホール、夜になると賑わいを増すレストラン等があります。そして、ここから自然に、道空間が四方に広がっています。そういったことを友人が非常に克明に追跡し、素晴らしいイドラの歴史についての本を出しています。地中海の沿岸の町と同じように、建築そのものは大体石造りで、屋根と床は木造です。しかし、さまざまな少しずつ違った工夫を凝らしながら、全体として一体感のある集落をつくりあげてきたわけです。

広場に面していくつかのレストランがあります。ここで非常におもしろいと思いましたのは、夕方レストランに行くと、最初にキッチンに案内されるんですね。それで、今日は何んなものを作っているか、どんな料理があるかということをお客さんが見て、それから席につくわけです。つまりメニュー代わりにキッチンに行くことができるという経験をここで初めてしました。地中海の素晴らしい水と空に恵まれて、美しい白亜のまちが発展してきたわけです。

ここで重要なことは、道空間が非常に巧みに造られていることです。ここではミュールと呼ばれるロバが2頭すれ違えるくらいの幅の道が、ほぼメインに属する道で、さらにこれより細い道が延々と山頂に向かって発展していきます。細い道に行きますと、子供たちが遊んでいたりと、それを見守る親の姿が見られます。まったく車のない所では、住民が道というものを、まさに公共の交わりの空間として100%使っており、大変心の温まる情景を展開していました。

(ある住居のプランのスライド) まず、道から小さな中庭に入り、その中庭から直接各部屋に入るといった構成です。時には、道から直接2階に上がる階段があるといった構成もあります。つまり街路というパブリックからセミパブリック、プライベートと変化する空間が、きわめて単純で巧妙な構成の中で、さまざまなバリエーションを持ってつくられているのです。

(洗濯物が干されている中庭のスライド) 中庭に入りますとその小さな中庭では洗濯物を干していたりする。ということで、集落のパブリックなものから、セミプライベート、そしてこういうプライベートな空間に至るまで、そこには何世紀にもわたる、積み重ねから生まれた生活のスタイルの形式が展開しています。日本の古い街並みな

---

どでもそうですが、“同じ原則を守りながら、少しずつ違った形が重層していく”例はよく見られます。

次にお見せしますのは、これはイスファハンというイランを代表する都市です。テヘランが日本で東京にあたる都市だとすると、ここは京都にあたる都市です。イスラム文化が開花した都市で、中央にメイダン・シャーという大きな広場があって、バザールやモスクがあります。

そして、ここの近くには素晴らしい、チャドゥ・パックというエスプラナードがあるんです。おそらく僕が今まで行ったエスプラナードで、一番印象に残っているものです。というのは、このエスプラナードは幅が100mあるのですが、まずその100mの内側に商店や家屋が面した歩道があり、それから車道があります。その車道の真ん中に、さらにもう一つ歩道が入っている。したがって、車道の中央にある歩道は少し盛り上がっています。そして歩道に沿って、何重もの街路樹が植えられています。

このエスプラナードは全長約2.5kmくらいです。一方は川に到達し美しいブリッジがあります。特に夕方くらいになりますと、多くの人が、仕事も終わって、家族と共にこの道を散策しています。一種の王道なんです。日本ではどうしても車が中心で、われわれはその両側に追いやられているのに対して、ここでは人が中心で、このエスプラナードは真ん中に人間の空間がある。もしイスファハンに行かれることがありましたら、ぜひ、この道の散策を楽しんでいただきたいと思います。

その次にお見せしますのは、アテネのまちの中にあるパナシナイコ競技場です。これも僕が50年前に撮った写真ですが、おそらく今も変わっていないでしょう。ちょうどT字型の道の末端に、その背後の小高い丘をくりぬいて、この競技場はつくられています。今度開催されるアテネオリンピックのマラソンの最後はここに来るんです。今までのどこよりも一番素晴らしい終着点になるのではないのでしょうか。この競技場の素晴らしい点は、人がまったくいない時にもある一つの景観をまちの中につくっているということです。この前の広場、すり鉢型の競技場、ちょうど向こうに見える木々と、ギリシャの円形劇場の風景をここで再現していると思います。また、ここで何か競技が行われても、人々の姿によってまた別の景観が生まれます。

たとえば、ローマで生まれ、日本でも競技場の殆どの形式になっている閉じた競技場が普通ですが、それに対してこれは開いた競技場です。「タダで見せては損ではな



いか)、という意識さえなければ、こういった開いた形の競技場が、都市景観の中でいかに魅力的であるかという非常にいい例ではないかと思います。

もう一つ、やはり車から開放された道空間として、チューリッヒのバーンホッフ・シュトラゼを例に挙げます。これは歩行者空間で、車は走っていないのですが、路面電車は中央に通っているんですね。昔、車があまりなかった頃は、東京にも路面電車が通る道がきちんと整備され、街の真ん中で威張っていましたね。このタイプの道は、今後我々の都市空間の中で充分考えてもいい道ではないかと思います。皆さんもご存知のように、路面電車は他の交通機関と比べて、一番事故の少ない安全な交通機関であることが立証されています。そういった点からも、やはりこうした形の道空間をもう一度見直すことが、非常に大事ではないかと思います。

## 食べることと道空間

また、“食べる”ということも、都市のライフスタイルの中でやはり、建築とどこか関わりあっているところがあると思います。これは確かヴェロナですが、この街ではこうした建物の間の道に向かって、少し窮屈そうかもしれないけれども、食べる場所があります。(建物に挟まれた細い道に並ぶテーブルと食べる人のスライド)

同じイタリアでも、これは1960年に、ちょうどローマオリンピックがあった年に行った時に撮った写真ですが、一種のちょっと裏道のよりくだけた食卓風景も見逃すことができないのではないかと思います。前年亡くなった有名なフェデリコ・フェリーニ映画監督が撮った「ローマ」という映画にこんなシーンがあって、確か人々が道にテーブルを出して夕方を楽しんでいるその前を路面電車が走っていくシーンがありましたが、まさに同じローマの中でも、きどったフォーマルな場所があったかと思うと、こうしたインフォーマルな場所もある。そこにおける人々の生活、感情の発露というのは、古今東西変わっていないのではないかと思います。イタリア人はオープンな、よりこういう形で食事を楽しむところがある。それがおそらくフランス人との違いになるものかもしれませんが、僕にとっては非常に忘れられないシーンの一つでした。

今度はまったく場所が変わって香港ですが、香港でも共通したシーンが見られました。さらにごちゃごちゃしたところに入ると、そこに食べるという行為が濃密に展開する道空間の生活があります。やはり都市の道空間というものがポジティブに使われ

ています。

現代の社会では、こういったことがどんどん廃れてくるんですね。その結果、みんな建物の中に入ってしまって、個別の生活を強いられている。現代というものが作り出すこうした生活の落差というものは、非常に重要です。いつも言っているのですが、「都市は、お金・権力・才能がある人にとっては、どんな時でも愉快的な場所である。しかし、そうではない人にとって、どのように愉快的な場所をどう提供するか」ということは、我々の現代の都市社会における大きなテーマであると思います。

ボストンにファンニューイホールというタウンホールが旧市街の中心部にあります。手前がシティーホール、後ろがクィンシー・マーケットといいます。昔、すぐ後ろがこの長い4階建てくらいのレンガ造の建物でして、僕がハーバードにいた50～60年代頃からぼつぼつと有名なレストランなどがこの中に出来てきました。これが70年代により盛大なフードマーケットとしてラウスというアメリカで有名なディベロッパーによって開発されたわけです。ここであらゆる種類の、エスニックのフード・マーケットがつくられました。この開発は非常にあたり、現代に至るまで、ボストンの名所の一つになったという場所です。

いつも思うのですが、人が物を食べている状況というのは、古今東西そう変わらない。皆楽しいところでおいしいものを食べれば、幸せそうな顔をしている。もちろん食べているものは地域によって違うかもしれませんが、地域や文化を超えてそういう雰囲気を作り出してくれる。たとえばちょっとしたスナック写真なんかのこういった情景は（屋台にいる女の子のスライド）、おそらくヨーロッパのチーズショップでも、日本の市場でも、ある基本的な人間の感情みたいなものが映し出されている気がします。

## 誰が東京をつくったか

ここまでが海外の事例です。もちろんもっとたくさん例があると思うのですが、少し時間も限られていますので、日本の事例に移ります。

これは、約150年前の東京です。1860年代の東京で、当時人口は130万人くらいだったと思います。町人町、それにずっと山手地区に展開する武家屋敷や寺町を中心にしたまちだったのですね。

現在の東京というのは誰が作ったのだろう、何が一番中心的な役割を果たしたかと

---

いうと、様々な見方があると思いますが、僕は鉄道がその一つだったのではないかと思います。

明治以後、もっと近代的な都市を整備していかなくてはいけないということで、1900年頃まで様々な新しい市街地の構想が生まれて、舗装された道も増えていきます。しかし、どこか日本的な特徴があって、外国の首都のように明快な道づくりは完成しませんでした。そしてその頃、山手線がすでにつくられ始めています。

これは1910年の写真ですが、山手線と中央線です。おそらくこれが現在の東京の構図を、ほとんど決定してしまったのではないかと思います。皆さんもご存知のように、こうした鉄道沿線を中心に、その後東京の都市づくりがすすめられていくわけです。郊外へ向かって山手線や東海道線の駅から電鉄がひかれ、さらにそれらが戦後発展した市街地中心部への地下鉄網と結ばれ、網の目のように新しいネットワークをつくり、今日世界にも稀な鉄道網が完成していくわけです。

このように見ていきますと、現在の東京の、あらゆるアクティビティのパターンは、おそらくこの山手線から発生している。もちろんそこから東海道線・中央線が延びているわけですが。では、どうやって山手線の経路・回路が決定されたかという、一番土地の安いところを選んだんですね。僕は子どもの頃から、山手線の内側に住んでいたのですが、すぐ崖下を山手線が通っていました。あの頃の大崎から五反田、目黒、渋谷にかけては谷でした。ですから、どこの土地が一番安く手に入るかという形で電車がひかれていった、というのは、おおよそ見当違いではないと思う。そのままさらに駒込をまわって新橋をつなぎ、品川をつなぎ、そして東海道線の方に行くわけです。一体誰がどういうふうにして山手線をつくりあげたかについては、歴史の中で一つのブランクとなっている気がします。どなたかがきちんと研究してくれると非常におもしろいテーマだと思います。

その後、このようにして東京の街は、次第に整備されていきます。表参道のようなブルヴァードも形成されていきます。山手地区においては、大きな武家屋敷が内へむかってさらに細分化され、深化していくという過程が見られます。その結果、非常に面白いヒューマンな道空間も生まれてきます。

下町では、大きな街区が、さらに細分化され、横丁や路地が発展していきます。

つまり細分化のプロセスとオーバーラッピングして大きな都市計画的な道路がつくられる。戦後にもなれば高速道路もつくられるわけですが、そういったいろいろなス



ケールのオーバーレイが同時に進行しながら、東京の街はつくられてきました。

ここで一つ話さなくてはいけないのは、同じ19世紀の中頃は、ヨーロッパでは中世都市からどうやって近代的な都市にしようかという時期であり、パリでは例のオスマンとナポレオン3世のもとで大きな都市改築が行われました。つまり、当時のパリでは新しいブルヴァードによって「視線による支配」というまちづくりを重視してきたわけです。ところが日本では、「どうやって、各拠点を一番安い土地を使ってつなげていくか」という利便性が重視されていました。基本的な都市への異なったフィロソフィが同じ頃に二つの都市で発生したというのは、非常に興味があることです。

ですから、現代のパリの都市景観というのは、ある新しい視覚的秩序をどうつくりあげるかということが、150年前に決定されて今日に現れていると言えます。

## 大規模開発における道空間の機能

その後、戦後に東京や日本の大都市では大きな開発が行われますが、道空間というものがその中でどのように機能してきたかということを話したいと思います。

1960年代の後半から新宿の浄水場の跡地に、新宿副都心ができました。これも皆さんご存知の場所であり、現在の姿があるわけです。こう見ていくと、明快なグリッドの街区を形成することから出発しながらも、日本の特別なさまざまな規制等によって、真ん中に大きな高層ビルがあって、道路と高層ビルの上に、もちろんそうでない場合もありますが、一つクッションとして低層の建物群と公共空間があるといった、珍しい形ができていったことがわかります。

そういう中で、丸の内というのは一番グリッドパターンを生かして、道と建築というものが一体となっている東京では珍しい姿として今日まであるということが、改めてわかるわけです。しかし、将来更に再開発が進めば、どういった形になるか、それについてはまったく保障できないことです。

最近、品川駅の東側に大きな開発が行われました。後でふれますが、汐留シオサイトについても同様に問題があると思うのは、この二つの開発はまったく周辺環境から切り離された形で、ある日突然大きなものができてしまっているという印象を与えているということです。ですから、この品川駅の再開発では、ランドスケープの人たちは非常に頑張って、興味ある広場を展開していますが、如何せん鉄道敷であったので、街の中に溶けこむ形でこうした大開発が行われていないという現実はどうしようもないというところがあります。

---

同じことは、汐留シオサイトについても言えます。確かに建物群自身は、それぞれの建築家が頑張っているのですが、それをつなげる空間、つまり道空間として、一人の人間として心地よい、そういう環境をもっとつくってほしかったと思います。たとえば汐留シオサイトと隣の浜離宮との間の関係性についていうと、非常に微弱なんです。浜離宮に行こうと思うと、延々と回り道して車道を渡り、小さな歩道橋を通過して、やっと到達するというように、周辺に対する配慮が少ないのではないかと。建物だけが積み重なっていて、我々が言うところの「目線からの都市景観」というものに対して、十分な結果を出していないということです。

次は六本木ヒルズですが、前の2つの例と違って、ずっと点数がいいと言えるのではないのでしょうか。それは、建築の質とかそういう話ではなくて、印象的な外部空間をいかにつくるかということに成功したからです。六本木の地下鉄の駅から登った高い位置に、大きな蜘蛛のオブジェがある広場があり、それからその下に日本庭園、またけやき坂通りという道が新しくつくられました。さらにそれらをつなぐ道具達として、天蓋付きの広場もある。これらが全体の景観をつくり、建築群をつなぐと同時に、それを通して周辺の街に溶けこませているということだと思います。それは、どんな場合でもこうした道空間、広場というものがなぜ必要なのかという事を雄弁に物語る良い例であると思います。

僕自身、テレビ朝日を担当した建築家として、ここがつくられていくプロセスをずっと見てきました。ここは去年の4月にオープンしたのですが、けやき坂通りのケヤキは、かなり成長したものを前の年の秋くらいに植えて、再開発には珍しく、そこにもう何年もあったんじゃないかという道があつという間にできました。それが周辺の街と融合させているところが少なくなかったと思います。

先の2例の再開発に比べ、もっとヒューマンな場所がここでつくられたということは、リピーターが多いということからでもわかると思います。目的的にある場所へ行くというのは、都市生活におけるひとつの機能ですが、同時にそこが楽しい場所なので、あまり目的がなくても何回でも帰ってくるということには、やはりこういった外部空間がいかに重要であり、それが決定的な役割を果たしているのではないかと。雄弁に物語っていると思います。

## 代官山ヒルサイドテラスの例

最後に我々が長年、朝倉不動産と一緒に開発してきました代官山の街を紹介します。

これがかつての1960年頃までの旧山手通りです。ここは、古くからの屋敷町で、一種住専の住宅街だったにも関わらず、道だけは昔から立派でした。これは、大地主であった朝倉さんの先代の方が、「やはり立派な道を作ることが都市にとって、長期的な意味で大事である」とおっしゃって区に働きかけ、その努力が実ったということです。これを見ていますと、広い道があって、しかし密度の低い場所が、もっと山手に多くあってもいいのではないかという気がしてまいります。ここは1960年頃までは本当に静かな屋敷町だったんですね。それが半世紀の発展の中で、やはり変わっていくわけです。

ここで私が考えたことは、道に沿って一つの壁面線を作ろう、ということでした。最初の頃は一種住専でしたから、最高10mでした。後にもっと高く建てられるようになったのですが、少なくとも手前の軒線は10mにして、後ろの方は少し高くするという形にして軒線を揃える、また小さな広場を作ったり、あるいは樹木を増やすなどしました。そういったルールの中で、構内に様々な道空間を作るということもあったわけです。

しかし、同時に何十年も経てば、建築の姿も変わってきます。しかし、その中で道空間だけは、コンスタントにあるという事です。

もう一つ重要なことは、ここは基本的に店舗・オフィス・住居という機能が入っているのですが、実際にこの計画を始めた10年目くらいから、文化活動の拠点を同時につくろうといったことを施主と一緒に考えるようになったことです。その結果、現在ありますように、エキジビションスペースがつくられたり、ホールが地下に設けられています。このようにして、ヒルサイドテラスは時間をかけて成長してきました。その中で絶えず外部空間というのは重要な役割を果たしてきています。ケヤキをさらに植えたのは、自然と建築というものをどう対話させるか、ということの一つの表れでもあります。

(航空写真、ヒルサイドとその裏にある大きな庭園) 現在のヒルサイドテラスのすぐ南側に、旧朝倉邸とその庭園があります。戦後、その3000坪にわたる広大な場所は、財務省が管理しておりましたが、この数年間、財務省の方も財政的にピンチで競売にされる可能性が出てきました、という話の中で、我々何十人かの者が中心になり努力した結果、旧朝倉邸が重要文化財に指定されて、文化庁に移管されることになりました。



た。そこから自治体（ここは目黒区と渋谷区の両方が交叉点を分け合っているところですが）、主に渋谷区がこの建物と庭園を管理するということになりました。そして公園として開放をされることになっています。こういう古い昭和の初めから存続している場所が、今後、ヒルサイドテラスと接続して、新しい公共空間が充実していくということは、非常に良いことだと喜んでいきます。

更に今後の代官山の姿ですが、我々としましては、ぜひこの旧山手地区を景観規制として、例えば高さは20mに抑える、あるいは看板規制といったものを厳しくすることも必要もあると考えています。自治体の方もそういった形で対応しようとしています。先ほどの福原さんの話にあったように、都市というのは上からだけの形でなく、その地域の人々が作り出すものであること、また、最初にいいましたように、時代の一つの秩序の表れとして、こういった例が将来、東京のさまざまな場所にできることを期待しています。

基本的には、これでいかに道空間が大事であるかという話を終わらせていただきたいと思います。

## 情報・イメージが商品化する時代

最後に、銀座のような日本を代表する盛り場が、将来どういう姿に変わっていくかということが、これからのお話になると思うのですが、我々がこれからの都市の中で考えていけないことは、都市とポスト産業資本主義社会の関係がどうなるかということだと思います。どういうことかということ、これからの資本主義というのは、いかに特別なものを新しく作り出すことによって、それが生み出す利潤を、都市に還元しながら共生していくかということであり、ポスト産業資本主義社会の本質なんですね。今よく言われているところですが、最終的には情報が商品化するだろうということもその一つです。建築の世界でいうと、建築のイメージが商品化されるということであって、そのために、建築というものが「古くからあるものの記憶の継承」という役割とはまた別な側面から見直さなくてはならないということです。

そういうことによって、青山のプラダとか、銀座にもエルメス、シャネルというような建築が出現してきたということは、差異性によってそのイメージというものを商品化しようという一つの表れだと思います。差異性とは、たとえば、洋菓子であれば一個10円とか100円のところでの勝負であり、皆がもっと同じ価格で特別なおいしいものはできないか、ということを競い合う。10万円のレベルだとパソコンですね。

---

どのパソコンが一番いいのか、差異性によってマーケットを支配している。100万円のところだと自動車です。自動車の差異性は、何か昔と比べるとどれも同じようになっていて、細かいところの差異性を比べあっているように見えますけれども。僕の子どもの頃は、遠くからあれがクライスラーだ、キャデラックだとわかりました。最近はずっとわからなくなりました。近くまで寄ってみて、ようやくBMW、メルセデス、トヨタの高級車の差が、マークでわかるようですが。

そして建築は億の単位です。億の単位で、何か新しい商品としてないかということが当然考えられるようになる。そうした社会的欲望の中で、一体街並みというのはなんだろうか、ということが改めて問われる時代になったと思います。

最後にスパイラルという建物を例にあげますが、これはおそらくイメージを商品化した先駆的な建築だと思います。1985年に、当時ワコールの社長だった塚本幸一さんに呼ばれて、「ここではうちの商品、つまりワコールの婦人下着は売らない。しかし今後、ワコールは新しいイメージで展開していく、そうしたものをヴィジョンさせる建物を設計してほしい」という話をされました。この建物にはエキジビション、シアター、レストラン、クラブ等いろいろなものが入っているのですが、そういったものを表現するのではなく、「ワコールは文化を目指しているんだ」という姿勢を表現して下さい、と言われた訳です。そういったものが、イメージを商品化する、ポスト産業資本主義社会の走りですね。塚本さんは、それをいち早く先見し、青山という場所にスパイラルをつくったわけです。それが20年後のたとえばプラダ、ルイ・ヴィトン等に増幅されていったわけです。

これからの社会は、いやおうなしに資本と情報と欲望、そういうものがいろんな形でもって、我々のところにおしかけてくることになります。それをどういうふうを受け止めるか、ということは、これから我々が直面する問題でもあるのです。そういう様々な結果を我々は、良いも悪いも含めて現実に東京の街に観ているわけです。

しかし一方で先にお話をしましたように、世界、そして日本、東京をずっと見ていくと、どこかにやはり人間の生活には定点的なものがあって、人間の基本的な喜び・悲しみといったものは変わらないでしょう。そして建築というのは恐らく今後も変わっていくものです。それに対して道空間は公共のものでありますから、恐らくどちらかと言うと変わりにくいものです。その道空間をどういった形でこれからの現代社会で充実させていくかが重要な課題です。古い町ですと、定住社会でしたから、延々と同じ

---

家族で何世代も過ぎてゆく。しかし、もはやそういうことは期待できない。非常に流動的な社会の中で、新しいコミュニティのかたちとは何なのか。そういった問いの中で、ある種の共同体を我々はつくっていきたいということ。その中で、空間的に言うならば、建築よりもやはり道空間みたいところで、様々な出会いがあり、そういったシーンを作っていくことが大事ではないかと思います。

ここらへんで、私の話を終えたいと思います。

## ●パネルディスカッション 「銀座の街並みをどうつくるか」

陣内秀信　こんばんは。今日はこんなに大勢の皆様にお集まりいただき、実はびっくりしております。これだけ銀座の街の問題は関心が高い、ということで、いろんなお立場の、いろんな分野の方に、お集まりいただいているのだと思います。

今、槇先生から本当に素晴らしい基調講演をいただきまして、これからパネリストの先生方と議論していく上での、基本的な方向性・考え方をはっきりと示していただいたと思います。先生は、代官山ヒルサイドテラスを初め、常に都市のまわりの環境・空間と作品との関係を考えて、まさに新しい空間の秩序を、一つ一つの作品を通じて見せてくださって、我々が訪ねると過去から続いている東京と、未来に造り上げていく建築の可能性というものを教えて下さっています。その槇先生が、今日は銀座の問題で、こういうふうに講演して下さったというのは、大変私たちにとってありがたいことですし、意味が大きかったと思います。お話の中にも、ヒントといいますか、考え方・キーワードがたくさんあったと思いますが、そういったことも念頭において、このシンポジウムを進めていければと思っております。

今まで小さな勉強会的な講演会やシンポジウムを、この10年の間に随分やらせていただいて、私も銀座の皆さんと一緒に、街づくりをお手伝いさせていただいております。

今までも都市史や建築史の専門の初田亨さんや岡本哲志さんから、銀座の街が江戸から明治、モダニズムの昭和の初期にどうやってできてきたのか、そして今の銀座の特徴は何なのかということをお話しいただきました。初田先生からは、銀座の先端の文化を生み出す場所として、いかに魅力的な建築やデザインの場所を造ってきたのか、という話をいただきました。また、この間のシンポジウムではもう少しシビアに、これからの都市開発について、銀座ではどういったことを考えるべきか、ということをめぐる、蓑原敬先生と中央区の吉田不曇さんを中心に、お話をいただきました。

常に地元からもパネリストが出ているのですが、銀座通連合会の前理事長であった小坂敬さんにも出ていただきましたし、前回と今回は、もともと銀座の歴史にも大変お詳しくて、銀座のことを語らせたら三枝さんしかいないのですが、地元ですと街づくりに関わっていらっしゃる三枝さんにいらしていただいております。

今日はまずは三枝さんから、地元からこの銀座の問題は何なのか、そして、どんな街にしていきたいとお考えなのか。そういったことを、まずお話をいただいて、それから森さん、そして團さんと進めていければと思っております。



## 銀座の街の特徴

**三枝進** ただいまご紹介いただきました三枝です。地元の商人でございまして、こういった高いところから銀座の街のことをお話する者ではもともとないのですが、銀座通連合会等を通じて、銀座の街づくりに少し関わってきたといったことがございまして、今日は前座を勤めさせていただきます。お聞き苦しい点があるかもしれませんが、ご清聴いただきたいと思います。

今日のテーマは、これからの銀座の街並みをどううまくつくるか、そしてできているものをどう動かしていくのかということも含めて、検討したいということだと思います。大変難しい、大きな問題ですので、すぐに結論が出ることはないと思うのですが、そのことに触れる前に、現在の銀座の街の特徴は何だろうか。そういったものをつかんでいかないと、銀座の街づくりも論じにくいのかなと考えまして、そういったことについて、まず確認をいたしたいと思います。

まず、銀座の街のスケールをどう考えたらいいのか、ということがありますが。ご承知の通り、銀座は、戦後になりまして、それまで銀座の東側に、昭和通り側のところに、ずっと細長く南北に接していた旧木挽町、この町は戦後昭和26年には木挽町ではなくて、銀座東という町名になっていましたが。昭和44年に木挽町の方々の希望もあって、この東の部分の銀座に統合するということになりました。面積としては旧銀座に対して大きな部分を併合致しまして、その頃新聞等到大銀座時代が来たと言われました。

と、申しますと大変広い町域が完成したように思えるかもしれませんが、実は大銀座などと申しましても、現在の銀座を平面的に見てみると、南北方向、つまり銀座通りの1丁目から8丁目までの距離は、大体1100mくらいしかないんですね。それから、それとクロスする晴海通りの筋、つまり東西方向に至っては、平均して約800m弱しかありません。従いまして、銀座8丁の総面積は86万㎡くらい、坪に直しますとたった26万坪。ですから、繁華街として考えると、どちらかと言えばごく小さな町に属するのではないのでしょうか。

要するに、銀座と言えはそういった小さな街で、だからこそ、どこに行くにしても歩いて楽しく行ける街なのです。それを我々は、銀座とはヒューマンスケールの街だと言っているわけです。こうした、歩いていくのに適切な街のサイズ、これは今後銀座の街づくりを考えていく上で、大切な地理的要素なのではないか、と考えています。それを考えながら街づくりをしていくことは、大変重要なのではないのでしょうか。



では、立体的にはどうなのでしょう。ご承知のとおり、現在の銀座は概して中層の建物で街が構成されています。道路ごとに大体高さの揃った街並みがあります。空も見える、雨も降ってくるという、街並みは一見平凡ですが、昔からの蓄積もあって独自の雰囲気を持った街をつくっていると思っております。

実はこの立体的な面に対して、大変大きなことがありました。5年前くらいに銀座地区の容積率や高さ制限がかなり緩和されたのです。それまでは、最大容積が800%で高さも42mくらいということで街がつけられていました。それに対して、最大容積が1100%で高さ56mという、地区計画の銀座ルールが、地元銀座と中央区の間で決められました。現在はこのルールに従って、銀座通り等を中心に、古い建物の更新が行われております。銀座にはだいたい1960年ごろに造られた建物が多いのですが、そういった建物が更新されつつある、というのが現状です。つまり、私たちは1998年に、建築ボリュームの上では、今申し上げたルールの範囲内でやっつけようとしたのです。

また、中身の面では、ちょうど銀座ルールが出来た頃、「銀座まちづくりヴィジョン」という、これからの銀座の街をどうしていこうかというヴィジョンを銀座通連合会から発表しました。そのヴィジョンでは、中身の面では、良質で外部に開かれた文化性の高い建物・施設が増加していくことが望ましいとうたっています。抽象的ではありますが、基本的な方向性がつくられてきている、というふうに私は感じています。

そのなかで、先ほど槇先生からいろいろなスライドを拝見させていただきましたが、いわゆる高層街、銀座の空を覆い隠してしまうような超高層の建物というのは、平面的にも立体的にも大変ヒューマンスケールにできあがっている銀座の街を、どうも損なってしまう恐れが大きいのではないかと感じています。超高層をベースにして街をつくるというのは、銀座の場合にはふさわしくない。私見ですけれども、私はそのように考えているし、銀座はそういう方向にはいかないということが、地元の人たちに合意されているのではないかと、というふうに考えています。

次に、銀座の道路構成・街区構成というのも、これからの銀座を考えていく上で非常に大切ではないかと思っています。ご承知のとおり、銀座では銀座通り、晴海通り、外堀通り、昭和通りといった、道の幅が25mを超えるような大きな通りが大きな骨格をつくっています。それから歩道のついた15m級の道路としては、銀座通りと平行する並木通りがあり、銀座通りにクロスして東西に走っている、みゆき通り、柳通りといった通りがある。それらによって、銀座というのは非常にわかりやすく構成されて

います。さらに、その中には幅員7～8mの、歩道のない通りが走っていて奥行きをつくっている。さらにその街区の中に、これは相当古くからあります路地が、網の目のように存在している。こういう形で、銀座の道路構成、あるいは街区構成はできています。

この銀座の町割は、相当古い時代からあまり変わっていないと言われておりまして、徳川家康の江戸時代の町割が基本になっているのではないかと、という説もあります。

明治初めに大火災があって、それをきっかけに煉瓦街ができたということは皆さんご存知だと思いますが、その煉瓦街を造る時、それを設計したウォートルスという男が、簡単な区画整理をしております、道路を一部廃止したりまっすぐにしたりしたのですが、それ以後ほとんど手がつけられていないんですね。それですと銀座の街の遺産のような形で引き継がれている。そういう古い街路・道路構成のところに厚い、多様な商業的機能が蓄積されている。そして連続する賑やかな壁面というものを構成している。これが銀座の非常に良いところだなと私は思っております。このあたりが銀座の街の、やや本質的といえる特性ではないかとも思っています。

## 都市再生法による大規模開発と銀座

ではこれからどうなるかという話になるわけですが、これもご承知のように、2002年に都市再生法という法律が、小泉内閣のもとで成立いたしました。この法律に基づきまして、我々の銀座地区も、都市再生緊急整備地区という地区に指定されました。これは、すぐにでも銀座の街に、大規模な再開発が具体化する可能性が充分にある、ということの意味しています。そういうことをやってもよろしいという地区に指定されたという状況です。もし、都市再生法に基づく開発が銀座に計画されるとすれば、これは常識的に言っても、当然超高層というものを核とするプロジェクトになるのではないかと予想されるわけでございます。しかし、これも私見になりますけれども、高層ビルを中心とするプロジェクトというものは、必然的に、抽象的で申し訳ないが、ある種の思想性というものを持ちこんでいると、どうしても思えてしょうがない。そしてそれは、銀座の持っている歴史とか景観とかいうものに、多分そぐわないものではないか。また、当然物理的な威圧感といったものも生まれます。そういったことを考えると、高層ビルを核とするプロジェクトが銀座にできるということは、非常に問題ではなからうか、と思っております。同時に高層ビルの持つ閉鎖性・自己完結性というものが、開かれた街並みというものに特徴を持つ銀座とぶつかるのではないかと、

と思えてなりません。

我々は、先ほど申し上げた銀座ルールという、地元の合意に従って、今後中層建物の良さというものを維持しながら、質的にはより成熟した文化性の高い街づくりをやるようとしています。そういったものをめざしていると私は考えております。したがって、これと相反する要素を持った超高層中心の開発には大変な違和感を感じざるを得ない。さらに言えば、最近の大規模開発を見ていると、もちろんいい開発・悪い開発、いろいろあると思いますが、概してデベロッパーサイドの経済合理性の追求のみが目立つ気がします。まわりのことがあまり考えられていない、文化的なことが考えられていない。早く資本を回収して儲けるにはどうしたらいいか、というソロバンが目立つ開発が多い気がしてならない。こういった高層ビルを中心とした異質な開発が、非常に小さいヒューマンスケールでできあがった街である銀座のかなりの部分に実現するということになると、銀座の景観・個性・街並みといったようなもの、銀座全体が育ててきた大事な財産に、非常にマイナスの影響を与えるのではないか。その結果、街づくりの上で、取り返しのつかないことにならないか。といったことをしきりに思ってしまうわけであります。

銀座には昔から、銀ブラ文化という文化があることは、よくご存知だと思います。この文化の本質というのは多分、高層ビルやアーケードなどのない、非常に開かれた快適な都市の景観を前提にして、そういった街並みを鑑賞しながら歩く楽しみを味わう、そういう文化であると思っております。したがって、この文化が成立する条件として、先ほど申し上げたヒューマンスケールの街であることが必要である。そして開かれた街並みが非常ににぎやかで、豊かにリズムカルに連続している。壁面がずっと賑やかに続いている。そういったことが前提で生まれ育ってきた文化ではないでしょうか。

このような銀座独自の文化と高層ビル開発は、同じことをくりかえしてしつこいようではすけれども、どうも相容れない体質をもった、異なる存在ではないかということ、改めて思うわけであります。

## 銀座にふさわしい開発を

いずれにいたしましても、私は銀座に開発はまったく必要ないとは思っているわけではありません。やはり銀座には、時代に応じた新しい街づくりも必要だろうとは思いますが、しかし、その条件として、まず第一に考えられるのは、そういった新しい計





画というのは、現在地元で考えられている銀座のあるべき姿と、当然ながら融合するものでなくてはなりません。相互に補完的な関係性や、連続性といったものをもって考えられなくてはならない、いきなり異質なものがドカンと出来るというのはまずいのではないかと。

第二に、その新しい計画が銀座独自の歴史・文化・空間等を破壊したり、大きく変えてしまうものであってはならない。銀座の命というのは、やはり街並みが連続していて、人々の回遊性が非常にいいというところにあると思うんです。ですからその人の回遊性を損なうものであってはならない、と強く思うわけであります。

最後に、当然ながら、あるプロジェクトが計画される時には、計画の当初から、地元との合意に基づいて、非常にオープンに企画され、推進される必要があると思っています。そしてその中身が新たな銀座の繁栄と文化的な成熟に大きく寄与するという、開発側と地元側との、共通な認識がなければならぬと思います。

いずれにいたしましても、都市再生法というのは、従来のルールを越えた、超法規的な法律といわれているわけでありますから、それに基づいた計画が出てきたときに、たとえ合法的であったとしても、合法的であるというだけで強引に法的に推進されてもいいということにはならないと考えます。銀座においては、そういった一方的な計画は確実に実行不可能であろうと私は考えているわけであります。

大変長くなりましたが、私の話はこれで終わります。

**陣内** どうもありがとうございました。大変明快に、銀座の地元から考える、銀座のあるべき姿の像をご説明いただきました。私見では、ということもおり混ぜながらお話しされましたが、銀座のかなりの人たちに共有されているお考えかな、と行ってうかがっておりました。先ほど榎先生がお話しされたことも一致する内容が多かったと思います。中層で賑やかで、しかもリズムカルなという表現を三枝さんはなさいました。榎先生のお話の中では、それぞれの建物が個々の個性をもっている、全体として魅力的な一体感があるという、そこにつながるとおっしゃいました。

超高層の建物がボンと、見えるところにそびえた場合に、圧迫感が生まれます。外国でもそうですが、とりわけ日本では道の魅力が重要で、建物が変わったとしても、街路がいかにか心地よく人々の記憶を受け継ぐかということをお考えすると、やはり中層がいいというお話が今あったんじゃないかなと思います。

そして賑わいですね。榎先生のお話の中で、ニューヨークの高層の足元にも人々が



集まるような、壁のメッセージだとかいろいろなことが工夫されてストリートライフがあるという事例がありました。そういうストリートライフあるいは賑わいを作っていくうえで、どんな高さ・ボリュームがいいのかというような問題点をたくさんご指摘いただいたのではないかと思います。

今のお話をうけまして、谷中を中心に、東京のあちこちの街づくりとも交流をなさり、全国の動きもいろいろご存知で発言していらっしゃる森さんにお話ししたいと思います。森さんの最初のお勤めは銀座だったということで、よそ者ではないらしいので、何年前かはお聞きませんが（笑）。そういうことで、銀座を大変愛して、よくご存知だと思います。よろしくお願いします。

### 歴史を見据えた街づくりを

**森まゆみ** よそ者だと発言しちゃいけないんでしょうか、なんて（笑）。もっと気楽な会だと思っていたのに、皆さんすごく真剣でいらして困っているのですが。今、私が話そうと思っていたことを、どんどん三枝さんがお話になってしまいましたので、ちょっと視点をずらして、私のやってきた20年間の街づくりの立場から、隣の街・銀座を見る、ということで話したいと思っております。

私は、母が日本橋で父が芝なものですから、その間にあたる銀座には、よく銀座に行こうとって、子どもの頃からよく来ています。とてもなつかしいところです。私がまだよちよち歩きで、ワシントン靴店の前で、靴箱を持っているという街頭写真がまだ残っております。22歳のときに初めて就職しまして、1年ばかり、中央通りの二本裏の古いビルにあったPR会社に勤めていたのですが、子どもの時に遊びにきた銀座と勤める銀座とは違うのだなと思えました。楽しい1年でした。夏ですと仕事が終わってまだ明るいうちにビヤホールに行ったり、ショッピングをしたり、映画を見たり、まだあった銀巴里に行ってシャンソンを聞いたりというように、ぶらぶらと遊んでいたわけです。

今三枝さんがおっしゃったように、銀座の魅力というのは、暮れなずむ空が見え、そして高さや壁面のそろった街並みがきちんとある、ということだと思います。丸の内は、先ほど槇先生もおっしゃいましたが、やはりきちんとした都市計画をしていて、100尺のビルの線をきちんとつくっていたのですが、このところかなり、景観的には攪乱されていると私は思います。ただ、その中でもやはり東京の顔として風格のある明治生命館が重要文化財になり、東京駅も重要文化財になり、日本工業倶楽

部もかなりの部分が保存できたりして、風格を守るといふ努力をしております。日本橋も昔はあそこが江戸の中心、一番の目抜き通りであつて、明治のある時期まで銀座よりも地価が高いという時期があつたわけですけれども、日本銀行が重要文化財ですし、三井本館も重要文化財になり、三越も都の選定を受けております。そういった意味では、銀座も風格のある、日本で一級の、ビジネスセンターというよりはもっと庶民に近い、お買い物ができる、皆が来て楽しめる場所としての歴史というものを、もっときちんと見すえていっていただきたいと思ひます。

隣の街から見ておひまして、たとえば交詢社だとか、東邦生命ビルなどが、あまり論議もないままになつてしまつたということが非常に残念です。まだまだ裏の方では残つておりますが、そういった建物をどうにか残せることができないものでしょうか。壊すにしても、ちゃんと論議をして、新しいものはどう建てるかということをおひで論議して、やつてほしかつたと思ひます。

ニューヨークなどは、あれだけのビジネスセンターでありながら、中にはいくつものヒストリック・ディストリクトを持っておりますし、古い建物をオフィスにして、そこで仕事をすることは誇りにもなつております。

私たちの目から見ると、江戸の町人地以来の銀座の伝統・歴史というものを、それ程注目していないように見えます。いつも絶えず更新し、あの店がなくなつた、とかいうことがずっと積み重なつておひる。三枝さんはよく研究していらつしゃいますが、そういったものがみんなのものとして、確実にアーカイブができていない気がいたします。

江戸の町人地から発展して、たとえば明治時代には岩谷商会の天狗煙草だの、岸田吟香の精綺水だの、原胤昭のはじめた十字屋だのというものが積み重なつておひる、記憶の継承をするということがなぜ街づくりの基本に据えられないのかということでおひす。モダンボーイ・モダンガールなんて言葉が出てくるのは、新居格が昭和2年に言つてからですが、新しい人たちが街を回遊しながら楽しむようになったわけでおひす。銀ブラというのはおひ、銀座をブラブラする、あるいは銀座パウリスタでブラジルコーヒーをおひ飲む、といろんな語源があるようでおひす。そういったソフトな歴史性、多様性というものを、もうちょっときちんと今の街に残すべきではなかつたかと思つておひる。

私たちの街は小さな街で、と言ひましても谷中・根津・千駄木も都心で、山手線の内側でおひす。そこで20年活動をしてきた立場から見ると、銀座は大変だろつた、気の毒だと思ひえなくもないところがあります。それは、一つは、生活者がいないといふか、

---

生活の匂いがしないことです。そこで子育てを共にするというような関係性、あるいは皆でお年寄りの面倒を見るといった関係性の中からこそ、やはり本当に利害を超えた、志のある街づくりができるように思えるのですけれども。その点で、生活までも共にする仲間というのは、銀座ではなかなか出来にくいのだろうなということがあります。ビジネスが中心の街で、やはり利害・お金というものが前に出やすいのだろうなと思います。それを乗り越えた、全体のために還元する旦那力、パトロン力というものも、余裕のある企業や商店には期待したいところです。

それから、地価が高すぎるということ。ですから、出来ないことが多いのではないかという気がいたします。私もいろいろなアジアの街を見てきて、うらやましいなど思うのは、谷中・千駄木でも住宅地が坪250万とかしてしまい、そのためにできないことがとても多いんです。一時、地価が高くなったということで、転売転売で儲けてきた人たちも全国的にいるわけですが、結局地価が高くなればなるほど、街づくりの面ではできないことが多くなり、自分たちの首を絞めていくのではないかと思います。代官山ヒルサイドテラスなどは、本当に稀有な地主さんと、稀有な建築家が一緒になってお仕事をされた、稀有な例だと思って尊敬しております。

普通の街ではなかなかできないことですが、ぜひ、銀座ではビジネスに関わっている方たちだけでお考えになるのではなく、槇先生が「お金がない人にも楽しめる街」とおっしゃっていましたが、そういった人たちをどうにか取りこんで考えていただきたいと思います。今秋葉原でインターネットの新しい実験をしたいアーティストを引きこんで一緒に街づくりをしておりますし、神田でもソバアートと言って、蕎麦屋さんが若い人アーティストとの人たちと新しい街づくりを始めております。そういったことも含めて。お金のない若い人たちも、そこで働いてはいないけれどファンである人たちも巻きこめるような形の街づくりというのを、ぜひしていただけたらと思います。

**陣内** どうもありがとうございました。銀座への注文というか、問題提起もたくさんしていただきました。

続きまして團さんにお話しいただきますが、團さんもあちこちの街づくり、あるいは環境・自然環境も含め、歴史的なその地域の文化の大切さにこだわりながらいろいろな街とのつきあいをされ、東京のさまざまな問題を、常日頃建築家として考えていらっしゃるお立場だと思っておりますが、銀座についてぜひお考えをお願いします。



**團紀彦** 今日には街づくり会議が設立されたということで、シンポジウムにお招きいただき、本当にうれしく思います。陣内さん、森さん、三枝さんがご一緒ということもありますし、また榎先生は私の恩師でして、10年ほど前の建築学会以来、こういった公のシンポジウムで、先生とご一緒させていただくのは2回目で、いろいろな意味で緊張しております。

結論から申しますと、銀座は、明治初期のウォートルスの頃から、あるいはそれ以前の江戸の後期から始まって連綿と続く近代史が、街並みと共に変遷していくなかで、現在はその切断面にいると思います。その流れのなかで、ここ特有の街並みのつくられ方が、今20世紀型の再開発に挑戦を受けているような状況にあるのではないかと、僕は理解しております。単なる経済の問題ではなくて、文化と歴史の問題ではないか、と思います。銀座はそのチャレンジに対してぜひとも、独自性というものを貫いていていただきたいなと思います。

そこで、そもそも20世紀型の都市型再開発というのはどういうものなのか、そして世界で最初の近代的都市再開発はどのような形をしていたのか、ということを見てみる必要があるのではないかと思います。そこで、今日は3枚だけスライドをもってきました。

僕は歴史家ではないので、もうちょっと早いものがあるのかもしれませんが、おそらくル・コルビュジエがパリで提示した、「300万人の都市計画」というものが、世界でいちばん最初の近代的都市再開発になるのだと思います。

これは、1920年の後半、1930年にかけてだったと思いますが、パリの街区に対して、都市型再開発のパターンを適用して、パリに提案をしたものです。黒い部分が既存のパリの街区であります。ここはだいたい低層の、ご承知のとおりオスマンがマスターアーキテクトとなって19世紀の中盤に改造したパリの、今でもある典型的な街です。それに対して、コルビュジエはそれを切り取る形で超高層を配置するという計画を出しました。

コルビュジエに関しては、個人の建築家としては、私が最も尊敬している建築家の一人でもあります。彼が1920年代に提示した「輝ける都市」という都市型再開発の手法とは、「従来の既存の街並みは低く抑えられて、街路と広場に、建物が近接しすぎていている。だから超高層を建てて、建物の間隔を広くあけ、その下を都市公園のようにしたらどうだろうか」という提案です。それが世界中に伝播して、日本でも新

宿の副都心を初めとして、そういった考え方でつくられてきています。先ほど、槇先生のお話の中でも、既存の街並みになかなか新しい再開発の手法が溶けこんでいかないのだ、という指摘がありましたが、なぜ溶けこんでいないのかということは、この、単純なグラフィックからもわかると思います。

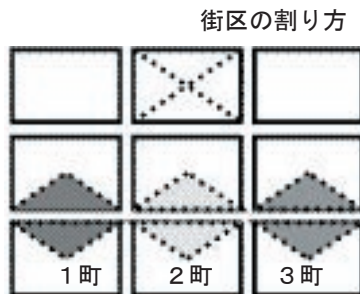
我々建築や都市デザインの仕事をしている人は、「都市のグラウンド」という言葉を使います。平たい街区を構成する建築物のことを、都市のグラウンドと呼ぶことが多いわけです。グラウンドをかきとる形で広場があったり、街路があったりします。ですから、街路と広場が密接に結びついているわけです。しかしコルビュジェの輝ける都市においては、地面がグラウンドになるわけです。

また、図と地という言葉がありますが、従来の街並みでは広場の方が図になりまして、平たい都市型の街並みの建築が地になります。しかし、「輝ける都市」になりますと地が公園になりまして、図のほうは建築物になる、建築が図形性を持ち始めるわけです。しかし、本来の街並みでは、建築物は図形性を持ち得ないんですよね。通りを歩いていますと、通りに面したファサードが、通りの空間に対して、いい意味での背景を形成していて、建築の外形のフォルムは見えてこない。しかし、コルビュジェ型ですと、超高層の建物は完全にフィギュアとして露出してきます。つまり図と地が逆転してくる。図と地の関係が逆のものを、どんなに都市の中に移植しようとしても、スムーズに溶けこんでこないというのは、ごくごく単純なことです。過ちと言い切っているかはわかりませんが、20世紀はそういったことがくりかえし行われてきたと思います。もともと馴染まない反転した発想を馴染ませようとしても、それは無理だということを強く感じます。パリではすでに1920年代にこの提案に対して“NO”という答えを出しています。

(パリの写真スライド) パリの場合には、道路と両側の建物を一体に整備をしているわけですね。街並みを考える時に、道路だけではダメですが、しかし道路はきわめて重要な要素です。そして、民間の建物のファサードと掛け算する形で、こういった街路空間ができていると言えるわけです。オスマンは、街区によっていろいろなマスターアーキテクトを、建築家を半官半民的なプロフェッションとして貼り付けて、その場所を構築していくことを30年弱やって、パリの改造をやっているわけです。

道路は官の管轄になるわけですね。そして、官民境界というものがあって、建物は民間になるわけです。日本ではパブリックという言葉が官という意味と、本当の意味での公共を意味する場合と、二つの意味を持っていることを整理しなくてはならないと

## 京都



思っています。街路空間をインテリアデザインのように考えることができるのではないかと。街路空間を細長い部屋と考えると、床は官の管轄としての道路、壁が民間の建物ですね。この民と官の掛け算によってできるのが、パブリックの公共の空間ではないでしょうか。ですから、パブリックというと、すべて役所が解決してくれるんじゃないかという誤解も、それは官と公の混同から来る問題で、街路というものをとってみても、“官かける民”が公共のスペースを作っていることが明らかなのではないでしょうか。

このスライドは銀座ではなくて残念ですが、広重が描いた江戸百景の浅草です。典型的な江戸の街路というものがわかりますが、建物というものが、一つの巨大なフォルムを主張しているというより、両側の内側の壁となっているように見えます。民のものでありながら、公的な性格を持っている。我々が街を歩くとき寝巻きで歩かないのと同じように、つまり身だしなみ的な感覚という性格があります。こういった街並みの、同じ材質でもいろいろなバリエーションがありながら、分節の仕方や線の位置といったものが統一されていて、古今東西そういったものがあるのではないかなと思います。

最後に、もう一つだけ、印象に残ったことを紹介したいのですが、京都はご存知のように、南北東西が明確な条里制の町です。その京都の1町の単位とは、このようになっているんですね（四角い街区の対角線同士を結んでできる、4つの三角形の道を挟んで向かい合う者同士の組み合わせ）。僕は京都の出身ではありませんが、なるほどなと思いました。普通ですと、ブロックが一つの街区の単位になってしまうことが多い、つまり道路や河川が行政境界になる。しかし、京都の場合は必ず道が真ん中であって、その向こう三軒両隣が街の単位となっています。ちょっとした違いですが、この第一歩を最初に間違えただけで、その後数百年の街の運命は変わると思うんです。最初の第一歩を右足から出すか左足から出すか、という初歩的な遺伝子の違いで街は本当に変わってくる。

僕は街は代官山ヒルサイドテラスのように、道沿いに街並みを形成するように、伸びて行ってほしいなと思うんです。代官山の場合には、榎さん、朝倉さんという素晴らしいコンビネーションの中で、横に線形に街並みを延ばしていこうという意思があったと思うんです。しかし、一般的な都市型再開発ですと、道路によって規定される巨大な街区というものを、その中を島宇宙のように作りあげてしまうというものが多。向こうの街区とこちらの街区をつなげる能力もありませんし、街路そのも

---

のを良くしていくという能力を持っていない発想ですね。僕は必ず道路の両側にこだわってほしい、ディベロッパーの方々が低層型で道を整備していくことがあればいいのですが、そういった意思を街づくり会議の方が主体的にもたれていくということが重要だと思います。

長くなってしまいましたが、私の話はこれで終わります。

**陣内** 大変具体的でイメージがわかる、建築家のお立場からのご提言、サジェスチョンをありがとうございました。

確かに、成功している街というのはそうになっています。新しいもので言えば代官山の町が旧山手通りの両側に展開していく一体感をつくりあげています。結構道が広いですけれども、一体感があります。

京都だけでなく、東京も江戸からずっとこうなっているのです。これはいわば日本の特徴ですし、両側町というのは、日本だけではなく世界の賑やかで活気のある都市の特徴だと言えます。特に日本の場合は、そこに住みながら商売をやっていたことが大きいですね。京都も江戸も、銀座もある段階まではそこで商売をして暮らしてもいた。まさに京都型の道を挟んだ両側町というのが、あるところまでは日本のベースになっていたのですが、どこからか忘れられてしまったということなのです。本当に重要な指摘をしていただきました。

また、コルビュジェの「輝ける都市」は、既存の都市ともともと相反するからこそ、当時新しい提案をしたということでしょうけれども、実際にパリの街の中では、決してあいつたことが実現したわけではなくて、後から近代都市計画を学んだ他のところが不用意に入れてしまった、というのが現実です。

私たちが東京大学で勉強していた時に、最初に設計の先生でいらっしゃった芦原義信先生が、『街並みの美学』という本を書かれています。その時にも「コルビュジェがいうような、搭状に立ちあがってまわりはオープンスペースというスタイルでは、魅力的な街はできない、街並みこそが重要」ということを強くおっしゃっておられたと思います。それから黒川紀章さんが翻訳した、ジェーン・ジェイコブスの『アメリカ大都市の生と死』という1960年頃書かれた本があります。アメリカでなされた、まさにコルビュジェを追及したようなスーパーブロック型で真ん中に高く立てて周りは緑地を取るというありかたが、いかにつまらなくて、治安も悪くなり、街並みの連続性が失われ、都市に賑わいや活気がなくなるか、というところが論じられた本です。





今まさに日本で読まれなくてはならない本だな、と思うのですが、そういったあらゆる問題を短時間に提示していただいて、本当にありがとうございました。

今日はいろいろな話が出ました。さっき三枝さんは、銀座はもともと開かれている街だというお話をされたわけですが、森さんからは、もっと記憶を継承し、モダンボーイ・モダンガールといったソフトの歴史性をもっと大切にして、今後に活かしたらいいのではないかと、といった提案がありました。あるいは生活者がいない辛さがあるのではないかと、地価が高すぎてなかなか思うことができない悩みがあるのではないかと、でもやれることはたくさんあって、たとえば秋葉原では、お金がないが元気・アイデアはあるといったアーティスト・若手を呼んで来て、街づくりに生かしている例も出されました。

また團先生からは、非常に明快な、わかりやすいイメージが出されました。そういったことをお聞きになった後で、地元の三枝さん、ご感想、ご意見をお願いします。

### 銀座を支える「住民」と銀座フィルター

三枝 森さんのご指摘というのは、大変銀座にとって鋭い、いわば一本取られたと言えるご指摘だと言えるんですね。先ほどから私は銀座の街は小さいと言っていますが、それでも26万坪くらいある。では、そこに生活している人、本当の意味で生活の根拠を銀座に置いている人が何人いるか、というと、3000人くらいが、一応区役所に届けている住民の数です。一時、2～3年前には、3000人をきって2700人くらいになってしまったのですが、今は3000人を越えております。超えていますけれども、それは本当に銀座に生活している人の数の実体か、ということではなくて、住民票だけ銀座におくことができるわけですね。「自分は世田谷に住んでいるけれども、住民登録だけは中央区の銀座でやっている」という方が、かなりいらっしゃいます。そういった方を本当の意味の住民でないとすると、住民というのはほとんどいなくなってしまいます。しかし先ほど申し上げました、旧木挽町地区に、最近マンションができるようになりました。それは地価やいろいろな関係から、そういったことになっているのだと思いますが、3000人を越えてきた原因は、そこにあります。これは本当に住んでいる人ですね。そういう人が増えたから、銀座の住民が増えたわけです。

しかしそういった人たちと、我々のような銀座で長年商売をやっていて、私も実は銀座に住んでいないのですが、意識としては非常に住民意識を持っている準住民みたいな人（こういった銀座の連合会に入っていたりするわけですが）とは、意識が随分

違っていて、一丸になれないところがある。私がさっきいろいろ言った中で、そのことは実は弱点なので隠していたのですが、森さんに見事に突かれてしまいました。

本当に、自分の街として愛着をもって、銀座を考えている人が何人いるか。生活感の乏しい銀座において、そのところはすごく抜けているわけですね。たとえば最近、大変お金持ちのカラオケ屋さんが、銀座通りに進出してくるということになりました。連合会でそれはやめてくれないか、といったことを申し入れているわけですが、銀座を本当に、根本から自分の生活の場、愛する街として考える人がいないことが、銀座にとって、これからますます問題になることは事実です。ですから大変鋭い指摘をいただいているわけです。

ただ、銀座には「銀座のフィルター論」というものがございます。銀座という町は、いわば銀座にふさわしくないものをフィルターにかける能力を持っているのです。全体として誰が持っているかとか、理事長一人がもっているとか、そういった話ではなく、銀座を愛して下さる方々が、「これは銀座にはふさわしくないのではないか。銀座にあるのはおかしい」ということでその店に行かなければ、そういった商店は自然になくなるわけで、そういった一種の、目に見えないフィルター作用というのがある。いわば、それを頼りにやってきたようなところがあるんです。

ところが世の中変わらして、そのフィルターがほころびてきたのではないかと。そうすると、それを繕うことも必要で、そんなカッコイイことばかり言っていられない。目に見えないフィルターがいつも自然に働いて、いつも自然に銀座らしくあるんだ、というのは、カッコいい、粋な考え方ですが、実際にはそうはいかない。そこで、たとえばカラオケ店の進出に関しても、抗議するということは、粋な銀座ではやらなかったのですが、そういった野暮なことでもなんでもやろうじゃないか、ということになっていて、ある意味追い詰められているとも言えるのです。このことを、一つの銀座の弱点なり要素として、どうカバーするかということがあります。

それからやはり、昔から銀座を支えてきたのは、銀座の中の商人たちでもありますが、実はお客様ですよ。現在でもそうです。銀座は大変高価なものを売るお店が多いですから、高級なお客様が多いでしょうと言われますが、必ずしもそういう方ばかりではありません。そういった銀座を愛して下さるいろいろな方々と我々がどう連携して銀座の街をつくっていくか。たとえば、銀座にはインターネットのホームページがあって、ものすごくヒット数が多いのです。それだけ銀座に関心を持っている方が多いわけですから。そういった新しいメディアを通じて連携を強めていく。あるいは



意見を聞きながら、銀座を良好にもっていく。そういったことは絶対に必要だと思っております。そういった意味で、大変ありがたいご指摘だったと思います。

**陣内** どうもありがとうございます。

今日は会場にそうそうたる方々、いろいろな分野でこういった問題に実際に取り組んでいらっしゃる方がいらしていますので、ぜひとも何人かの方に、ご意見・ご質問をお願いしたいと思います。ご意見でも歓迎ですが、銀座はこうしたらいいののではないか、こう考えるべきだといったサジェスチョンをいただけたらと思います。

### アジアへの情報発信力を

**田中** 田中と申します。今日はおもしろい話を、どうもありがとうございました。私も銀座が非常に好きなんですけれども、最近、丸の内や六本木に比べて、ちょっと情報発信力が落ちているのではないかという気がいたします。私が思うに、以前は西洋のものを銀座にもってきて、それを地方にまいていくといったそういった情報発信力が問われていたのに、地方の銀座というところも、どんどんなくなってきていて、カタカナの名前の連合会に変わっていきついでいます。

そうした中で思うのですが、現在非常に都市間競争が起きてきている、アジアの人たちが銀座にもっと魅力を感じて来てくれるようなことはできないのでしょうか。国内の中で話をしていると、どうしても地方対豊かな都市という話におちいってしまうのですが、もっと昔からもっていた銀座のブランド価値、伝統を、銀座からたとえばアジアの世界に広げていくような、そういったことが問われ始めているのではないかと思うのです。これについてうかがいたいのですが、いかがでしょうか。

**陣内** 大変重要なご提案だと思います。シンガポールのオーチャード通りと銀座の方々が交流したことがありますね。そういったことを芽生えとしたり、あるいは中国でも歩行者空間化をどんどん進めていて、街が賑わいを取り戻し、ある意味で銀座より先に進んだ街づくりを頑張っている例もあつたりします。ですから、そういった交流は本当に重要だと思うのですが、三枝さん、いかがでしょうか。

**三枝** 私は、銀座はいわゆる「盛り場」であり、盛り場として栄えていかなければ、これからもうまくいかないのではないかと思っております。陣内さんに教えていただ



いたところでは、「盛り場」という言葉は、外国語にしにくいらしいですね。おそらくヨーロッパやアメリカの概念の中に、「繁華街」というのはあると思うのですが、「盛り場」というのはないのかもしれないかもしれません。しかし、アジアの国には「盛り場」というものがあります。そのへんのところは、やはり考えていく必要があると思います。

今の話で、銀座はシンガポールのオーチャード通り・商店街・盛り場と提携を組んだりしているのですが、そういった話だけではなく、同じ盛り場のあるアジアの街と銀座とが、もっと根の張ったつながりをもっていくというのは、大変大事だろうと思います。ただ、それにはやはり、基本となるベーシックな交流というものがなくやりにくいです。シンガポールのオーチャードストリートと、提携しましょうと言って、一回行き来をして、提携契約書にサインする、という話ではないのだと思います。本当の意味で、銀座の人たち・商店・街とアジアの街の盛り場の人たちと、どうやって本当の血の通った交流のできるベースをつくるか、というのは難しい問題です。たとえば外務省の力を借りて提携してみよう、ということはしているのですが、それではうまくいかない。もっと民間ベースで、街と街の人が共通のことを見つけて、行動に出る・交流の場を広げる、という街の人ベースでの広がりを作らないと、どうしてもできない。そういった仕組みをどうやってつくるかというのが大きなポイントだろうと思います。難しい問題ではありますが、私は盛り場同士の問題は、つくらないといけません。情報量が落ちているという話もありましたが、“アジアの盛り場同士の連携”というのは大変おもしろいアイディアだし、銀座としてやるべきだろうと思っています。

たとえば銀座には非常に画廊の蓄積が多いのですが、アジアの美術は今、非常にいいですね。一部の画廊の人たちが、美術を通じてそういった人たちと色々な連携を取る、ということが始まっています。それをみんなで応援することが、一つのきっかけになりうるかな、と思っております。

**陣内** どうもありがとうございます。今日、会場にはいろいろな専門家が何人もお越しです。その中で、日本の街づくりを牽引してこられて、今も街づくり学会の会長をお勤めの、田村明先生がいらっしゃっています。横浜の街づくりで見事な成果をあげられ、その後法政大学でも長くお勤めになられました。いろいろなお立場で、この問題に取り組んでこられています。銀座ロータリークラブの会員でいらっしゃるということで、銀座とも大変関係の深い先生です。今日の議論をお聞きになっていて、何か



アドバイスとかお願いできればと思うのですが。突然ですみません。

## 銀座ファンを大切に

**田村明** 私が突然発言していいのかどうか問題ですが。今日は槇さんをはじめ、出られている方が、皆私の親しい方ばかりなので。数日前に、今日のことを聞きつけまして、喜んで参上させていただきました。

陣内さんの話がまだないけれど、全部の話、大変おもしろく拝聴いたしました。私も、銀座がとにかく好きなんです。子どもの時代から好きなんです。私は子どもの頃、青山に住んでいました。親父がこの辺にある会社に勤めていたので、市電に乗って時々連れてきてもらいました。銀座には縁日というか夜店があったんですね。これを歩くのが何か楽しくて、銀ブラをするほど買い物するわけではないけれど子ども心に、夜店に行ったということが今でも非常に印象に残っています。

今も銀座の通りを歩かせていただいています。いろいろな街を見ましても、銀座はやはり歩ける空間なんです。あれだけの通りで、盛り場であって、しかもやっぱりゆったりと歩ける。これが銀座の一番の魅力だな、と思います。これだけの広い空間で、リッチなものが密集していて、しかもゆったりと歩ける。これはやはり、今までの人々のご努力で出来てきたんです。

ですから、森さんから生活者がいないというお話がありましたが、生活者まではこの街はどうなのでしょう。生活者は谷根千の方でお任せしていいのではないかと。東京で生活している人たち、僕のように横浜に住んでいる人がここ銀座に来たくなる、というのは、定住している人ではないけれど、半住民ではないかなと。盛り場というのはそういったファンクラブ、半住民みたいなものをたくさん抱えているものだと思う。それが銀座の強みなんです。各地に銀座があって、それがなくなったことを寂しがっている人もいますが、私はこれは、むしろいい条件ではないかなと思っています。皆があちこちでギンザ、ギンザと言っていて、あれでは銀座の安売りなので、むしろ今こそ東京の銀座がはっきり浮き出してきたわけです。そういう強みを、これから活かしていくことが大事です。他は他で任せておけばいいんです。銀座は銀座で、たくさんのファンを持っている。そのたくさんのファンを悲しませるようなことはしない、そういうことで連合会の方もやっていると思いますが、そういうご努力をこれからもしていただきたいと思います。言うことはたくさんありますが、このくらいにしておいて。一人のファンとして申しあげます。



陣内 どうもありがとうございました。ファンクラブ、大切だと思いますね。銀座の方は自分たちだけですべてのことを考えてということではなくて、銀座が大好きで、あるいはいろいろなかかわりを持っている方々、遠くから来る方々、しょっちゅう来られる方々、そして働いている外から来る方々、あるいは外国人の方々、そういう皆の思いが銀座をつくってきたし、これからの一番頼れるものだとすると、銀座のファンクラブを大切にしたいと思いました。

榎先生、最初に基調講演をいただいた後、みんな勝手なことを言ってきたかもしれませんが、ずっとお話を聞かれていて、最後に何かご感想があればお願いします。

## 日本人のふるさととしての銀座

榎 田村さんは私の先輩になるのですが、今のお話をうかがって一番共鳴するのは、銀座というのは、東京の銀座でもなければ銀座の人の銀座でもなくて、やはり我々日本人の、特に明治以降かもしれませんが、何かふるさとみたいなものだという事です。今田村さんがおっしゃったように、それだけ大事な街なのだという事を感じ、改めて銀座が何かを発信する重要性があるのではないかと思います。

先ほどのお話の最後に、情報社会の特質として建築が新しい交換価値を持ってきているという話をしたのですが、銀座の持っている、ポテンシャルとしての情報価値と（ファンクラブでも何でもいいのですが）そういう人たちとの新しい媒体を、そしてそういう媒体を通してのコミュニケーションのあり方というのをどういう形で作っていくかが大事ですね。それは先ほど森さんのお話になっているように、非常に大きな問題を抱えていることはわかるのですが、今ある 21 世紀の情報技術をどういう形で駆使して、どういう形で発信するのか。何かことを挙げるというだけではなく、イメージとして銀座というものを、総体として発信していく、その戦略が必要です。じっとしていると、どこかでだんだんと翳っていくところがあります。「情報が商品とになっていく」ということは、銀座の外側からいろいろな形でかかってくるプレッシャーとしてもあると思うのですが、それをネガティブに捉えれば怖い力ですが、ポジティブに捉えて、逆にそれを利用していくというスタンスが、これから生き残っていく上で必要なのではないかと思います。銀座の皆さんが新しい競争心を持って、ことに当たっていく、それが大事だという気がいたします。

---

**陣内** 本当にどうもありがとうございます。

先ほど團さんが「銀座は今、20世紀の都市型再開発に挑戦を受けているのではないか。これは単に経済だけの問題ではなく、文化と歴史の問題である。そこから銀座の独自性を作っていかななくてはいけない」というお話をされましたが、それが、槇さんがおっしゃった「情報が商品として価値を持ってくる」という話とつながってくるのではないかと思うんですね。まさに銀座の可能性がそこから見えてくるのではないかと、思います。つまり、挑戦を受けているのですが、逆に今度は銀座ならではの発想で、銀座の固有性・独自性を発揮できる、情報を発信できる、そういった戦略が必要だと、今槇先生がおっしゃってくださったと思います。

考えてみると、海外の有名ブランドの店舗・オフィスがどんどん入ってきているということは、すでに彼らが先に21世紀型のありかたをキャッチしているわけですよね。それは多分、銀座の都市空間が街路も含めて魅力があるということ、東京の中でも圧倒的に魅力・可能性・風格もあり、人を惹きつけるものを持っている、ということもキャッチして出店しているのではないかと、思います。今度はむしろ銀座の人たち、あるいは日本の人たちがそれを鋭敏にキャッチして、この街の個性を理解し、さらにひきだして伸ばして行くようなそういった方向に戦略を考え実行していく時期がきているのではないかと、思いました。

銀座と、銀座だけでなく日本のこれからの街をつくっていくことに関わっていらっしゃる会場の皆さんも含めて、今日のお話は大変参考になるのではないかと、思います。今後もこの活動を続けていきますし、銀座の街づくりが本格的に展開するのは、まさにこれからで、ようやく準備が整ったということだと思います。今後ともどうぞ銀座のことを応援していただければと思います。今日は槇先生初め、皆さん、ありがとうございました。これで終えさせていただきます。

---- どうもありがとうございました。これで本日のプログラムは終了いたしましたけれども、閉会に当たりまして、銀座通連合会理事長、銀座街づくり会議評議会議長の遠藤彬より、ご挨拶させていただきます。

**遠藤彬** 皆様、大変長時間、最後までご清聴いただきまして、ありがとうございました。そしてご講演くださった槇先生、本当にありがとうございます。本当にお人柄がにじみでるような講演をいただき、都市の道空間、それから銀座の街並みと外国の街並みとを比較していろいろと勉強させていただきました。実は、槇先生にご講演をお願いにうかがったときに、槇先生とお話ししている中で、「銀座に来るとほっとするよ」という話をお聞きしました。そのことが銀座にとって本当に大切なのではないかと思っております。

また團先生には本当に明快な、こんな開発をするようになってしまうという具体的な話をいただきましたし、銀座の街並みを、本当に大切にしていかななくてはいけないんだと、つくづく感じました。森先生にも貴重なご提案をいただきましたし、それから陣内先生にはいつも銀座のためにお力をいただきましてありがとうございます。三枝さんはいつもながら、銀座を代表してお話をいただきました。

銀座では、このように「銀座街づくり会議」を立ち上げました。今後もいろいろなことが起きてくると思いますけれども、なるべく皆さんに情報を開示しながら、皆さんと一緒に街づくりをしていきたいなと思っております。またの次の企画の時には、大勢の皆さんに来ていただいて、皆さんと一緒に、素敵な銀座をつくって生きたいと思っております。先ほどから槇先生その他から、「もうちょっと銀座、しっかりせい」と言われている気がしまして、我々も一生懸命やっていきたいと思っております。本当に本日はありがとうございました。

---- これで本日のプログラムをすべて終了させていただきます。銀座街づくり会議は発足したばかりですけれども、銀座内外の皆さんからのご意見をお待ちしております。アンケートをお手元にお配りしていますので、どうぞご記入いただきまして、お帰りに受付にお出しいただければありがたく思います。では最後に、本日の講師の皆様、改めて拍手をお願い致します。